

○行岡 千佳子¹, 中原 英子², 房間 美恵³, 行岡 久美子⁴,
黒岩 孝則⁵, 井上 都⁴, 東 香代子³, 三浦 靖史⁶,
大澤 傑¹, 村田 紀和¹, 史 賢林⁷, 三木 健司⁸,
橋本 亮太⁹, 栗谷 太郎², 前田 恵治², 佐野 統¹⁰,
行岡 正雄¹

¹行岡病院 整形外科,

²NTT西日本大阪病院 アレルギー・リウマチ・膠原病内科,

³NTT西日本大阪病院 看護部, ⁴行岡病院 臨床心理部, ⁵行岡病院 内科,

⁶神戸大学大学院保健学研究科 リハビリテーション科学領域,

⁷大阪大学大学院医学研究科外科系臨床医学専攻器官制御外科学,

⁸尼崎中央病院 整形外科, ⁹大阪大学大学院医学系研究科精神科,

¹⁰兵庫医科大学 リウマチ・膠原病科

【目的】線維筋痛症(FM)及び関節リウマチ(RA)患者の精神面と痛みの関連について評価する。

【方法】痛みは、FMではJFIQの疼痛を、RAではpain-VASを用いた。鬱はCES-Dで、不安はSTAIで評価した。有意差検定はWilcoxonの順位和検定及びPearsonの χ 二乗検定を用い、痛みと精神面の関連性の検定はピアソン積分相関係数を用いた。年齢補正は共分散分析及び層別分析を用いた。

【結果】FM 75名(男/女: 9/66名、平均年齢: 46歳)、RA128名(男/女: 22/106名、平均年齢: 55歳)。CES-D (16 \leq)でカットオフポイント以上の患者はRA(31名)よりFM(51名)で有意に多かった($p < 0.0001$)。CES-DはRAよりFM患者の方が有意に高かった($p < 0.0001$)。STAI (State)もFMの方が有意に高かった($p < 0.0001$)が、STAI (Trait)では有意差はなかった($p = 0.074$)。RAではCES-Dとpain-VASに有意な関連が見られた($P = 0.0482$)。向精神薬の有無に分けCES-Dと痛みの関連を見たが「服薬あり」($P = 0.6498$)、「服薬なし」($P = 0.1058$)のFM患者とも有意な関連は見られなかった。一方、「Bioあり」のRA患者ではCES-Dとpain-VASに有意な関連はなかった($P = 0.6926$)が、「Bioなし」のRA患者では関連する傾向が認められた($P = 0.0546$)。

【結論】FM患者の方がRA患者より抑うつ症状および状態不安が有意に強かった。RAでは痛みと抑うつ症状に関連性が見られ、特にBio未使用患者で有意な傾向が見られた。